

授業に必要なのは「先を読む」こと

1. 出動せよ、雲上のレスキュー隊

3月はじめ、NHKテレビで放映された「仕事の流儀」という番組を見ました。この番組は様々な仕事に打ち込む人物像を毎回魅力的に描き出していて、これまでも何度か見ていました。けれども、今回はどうしても見なければならぬ事情が生まれました。というのは、かつて訪問していた学校の校長だった人からこの番組を見てほしいという連絡があったからです。

退職されたその人が昨年の夏に剣岳に登山されたのです。その剣岳で滑落事故が発生し、そこにいた富山県警山岳警備隊の隊員が緊急出動するのを目にすることになります。ちょうどその警備隊の分隊長の活動をNHKテレビが撮影していて、その一部始終が収録されたのです。元校長先生は、「ロープ、ヘルメット、無線機を握って登山道を駆け出していった使命感に燃えた後ろ姿を印象深く」感じ、出動した後の警備隊がどのような救助活動をしたのか、それが「どんな映像になって流れるのかに注目している」とわたしに知らせてくれたのです。それは、わたしにも是非見てほしいという誘いでした。

その番組には「出動せよ 雲上のレスキュー隊～山岳警備隊・山田智敏～」とタイトルがつけられていました。元校長先生が目にした分隊長は、山田智敏という名前だったのです。何人もの隊員を率いて山の警備と遭難者の救助に当たる山田分隊長の活動、そして、その仕事に就くようになるいきさつなどを見ているうちに、わたしは画面に引き込まれていきました。

放送では、元校長先生が遭遇した滑落事故とさらにもう一つ別の滑落事故の様子が取り上げられていました。一つ目の事故においては、登山道を駆け出していった先発の隊員の無線を受けた山田分隊長が的確な指示を出し、要請したヘリコプターに無事収容される様子が映し出されました。

そして、画面は、もう一つの滑落事故発生場面になりました。

一刻を争う遭難者の救助に直面する警備隊、もっとも素早くそのうえ二重遭難を防ぐ救出にはヘリコプターによるつり上げがよいのですが、山の地形と天候がそれを阻みます。どうすればよいのか、遭難者の生命の危機が迫るなか山田分隊長は雪面の運搬を決断し、それでも絶えずヘリコプター救出の可能性を探り続けます。大勢の隊員を率いて敢然と救助活動を進める分隊長。そして、わずかな晴れ間を活かしたヘリコプター輸送が実現。無事につり上げて飛び去るヘリコプターを晴れやかに見つめる山田分隊長や隊員たち。番組の最後にナレーターから遭難者が命を取り留めたことが語られ、テレビを

見ているわたしまでほっと息をついたのでした。

2. 「先を読む」ということ

番組は、山岳救助の大変さとそれを力強く決行する山田分隊長の判断力・行動力が見事に描き出されていて、本当に感動しました。けれども、それとは別に、いつの間にか、わたしが登ったことのない高山における警備活動であるにもかかわらず、わたしの仕事、つまり授業づくりにおける自らの考え方との接点が色濃く浮き上がってきて、思わず何度もうなずいてしまいました。その一つが、本論で述べる「先を読む」ということでした。

警備活動において、山岳に関しても救助や警備の方法についても、しっかりした知識と体験が必要なことは言うまでもありません。けれども、それだけでは適切な警備活動はできないのです。それは、そのときの状況をとらえるということと、何をすればどういふ結果になるかという「先を読む」ことが必要だからです。

剣岳での救助活動はまさにそういう場面でした。二重遭難を防ぐためヘリでの救助が最適であるにもかかわらずそれがままならない、だとすれば、どうすることがもっとも適切なのか、そして、天候についても、遭難者の状態にしても、山の状況にしても、そして警備隊の人数や状況についても、どういう状況なのか、この先どうなりそうなのか、その「今」と「先」を読み、一つひとつの判断を下していたからです。そのとき画面に「先を読む」という「仕事の流儀」を表すことばが映し出されました。

授業づくりに関して、わたしは、「即興的対応」こそ、教師の専門性の最たるものだとこれまで述べてきました。どれだけ事前に研究していても、どれだけ準備していても、どれだけ丁寧な指導案をたてていても、生きた子どもを対象に、その子どもとともに学びを生み出す授業という営みは、その時その時に生まれる事実に対して即興的に対応しない限り、豊かな学びは生まれないと思うからです。つまり、それは、子どもと対峙している「今」をとらえることがいかに大切かを物語っています。そう考えていたわたしに、山岳警備隊の山田分隊長のその「先を読む」ことが大切なのだという考えが、鋭く、しかも感動を伴って飛び込んできました。

子どもの中にその時その時の「学び」を生み出すには、今、子どもたちの中に何が生まれているのかが見えなければどうにもなりません。その「今」をとらえること、見えることを授業者としてわたしは追いつけてきたのです。けれども、その「今」をとらえるということは、そのとらえたことがこれから「先」とどうつながっているかが見えなければ、「学び」を生み出すことはできないわけです。つまり、わたし流の「即興的対応」とは、「今」が見えるとともに「先」を読むということにならなければいけないということだったのです。

3. 直近の「先」、遠くの「先」

考えてみれば、教育において読まなければいけない「先」は非常にたくさんあります。

というより、すべてがすべてそうだと行ったほうがよいかもしれません。今この発問を出すことがどういう学びにつながるのかといった直近の「先」のことから、一年先、もっと言えば、学校を卒業するときにどんな子ども、どんなクラスに育てたいかといった遠くの「先」もあります。教育においては、そのどちらも大切にしなければなりません。

皆さんがこの文章を目にされるのは、新しい年度が始まる4月です。そういうことからすると、新しい学級を一年後どのような学級にしたいのかという「先」を考えつつ、一日一日の子どもとのかかわりを行うことが大切なのでしょう。もちろんそれは、教師の一方的な思惑であってはなりません。出会った子どもたち、目の前の学級のすがた・特長・課題をもとに設定した「先」でなければなりません。

これまでにわたしは、この学級、この子どもたちが、秋になったらどうなっているかを常に考えて、4月から一つひとつの教材の指導を心がけるべきだと言ってきました。その場の思いつきとか、指導書に書かれているそのままを、何の考えもなく惰性のように繰り返す授業では、わたしの言う「秋」という「先」にはつながりません。

学ぶ会に來たり、セミナーに参加したりした人が、そこで目にした授業に感動し、それをそのまま自分の教室ですぐに実現しようとしてしまうことがよくあります。それは決して悪いことではないのですが、自分の学級の子どもたちの「今」をしっかり見つめないで、その「今」から目指すすがたまでの道筋の見通しも持たないで、いきなり憧れの授業を子どもに押しつけてもうまくいくはずがありません。

そういう意味では、遠くの「先」を考え、その「先」を目指すことは大切なことなのですが、それが「今」とどうつながっているのかが見えないと、憧れの「先」は、絵に書いた餅にしかならないのです。

そこで大切になるのが、直近の「先」です。そして、その直近の「先」がどう遠くの「先」とつながっているのかが見えていたら言うことなしです。遠くの「先」を見据えながら、今、目の前の「先」を読んで、具体的にはたらきかけ、子どもの事実にして実現していく、その「即興的対応」が何より大切なのです。

4. 学びを生み出すために「先を読む」

1月にある学校の公開研究会に参加したとき、かつて訪問していた学校のKさんから授業のDVDを託されました。授業を見てコメントをお願いしたいというメッセージを添えて。

そこに収められた映像を見て感動しました。聴き合い学び合う学びとはまさにこういう授業を言うのだと思うような子どもたちのすがただったからです。わたしは、45分の授業を見られるように見終わりました。そして、わたしがかわった学校で、このように素敵な授業が生まれ続けていることを心からうれしいと思いました。

けれども、この授業にコメントをと依頼されたKさんの思いを考えると感激ばかりしてはいられないと思いました。Kさんはさらにその先を学びたいと思っておられるからです。それは、この素敵な子どもの学び合いにどう「ジャンプ」を仕掛けるかということなのでしょう。わたしは、その期待に応えなければならないと思いました。

テキストは「おにたのぼうし」(あまんきみこ作)。節分の日には豆まきを避けて、豆のおいもせず、ひいらぎも飾っていないある家に鬼のおにたが入り込みます。そこで、母親の看病をする女の子のすがたを目にします。何も食べていない女の子。おにたは、その女の子に、赤ごはんとうぐいす色の煮豆を持って行ってやるのです。喜んで食べる女の子。そのとき、女の子がつぶやきます。「あたしも豆まきしたいな」と。その一言にとび上がるおにた。授業は、その場面でした。

Kさんの授業は、二つの子どもの問題提起によって構成されました。一つは、「女の子が『あたしも豆まきしたいな』と思ったこと」、もう一つは、そのことばをきいた「おにたがとび上がったこと」でした。

一つ目の「女の子が『あたしも豆まきしたいな』と思ったこと」について子どもたちが述べていることは次のようなものでした。

- ・長いこと豆まきしていないから豆まきをしたいと思った。
- ・節分は豆まきをするものだから。
- ・自分だけしないのはいやだから。
- ・この子(おにた)なら豆まきをしたいという悩みをきいてもらえるかもと思った。
- ・お母さんの病気が悪くならないように豆まきをしようと思った。
- ・豆まきをすると福が来ると思うから。

女の子は、「みんな豆まきすんだかな」とつぶやいていますが、子どもたちは、このことばから、自分も人並みに豆まきをしたいという子どもらしい思いを感じ取り、その女の子の思いに共感しているのです。一方、お母さんの病気を悪くする鬼を追い払うために豆まきをとということももちろんあります。それはお母さんを看病する女の子としては心からの願いです。そのことも子どもたちはとらえています。

一方、二つ目の「とび上がったおにた」についても、とても大切なことをつかんでいます。「女の子と友だちになれると思っていたから」、「ここやったら豆まきするとは思わなかった」という考えが子どもからずっと出てきているからです。そのことについてその後、グループの学びもしていますが、そこでも「豆もないし、ひいらぎもない。おにたは、女の子はやさしいと思っている、それなのに『豆まきしたい』と言ったから」などと述べています。そして、グループが終わった直後にも、「仲良くなれると思ったら『豆まきしたい』と言ったからが一んときた」という発言や、「またぼくはきらわれるんやな」ということばも出ているのです。

そのように読んでいる子どもたちに対して、どう「ジャンプ」を仕掛ければよいのでしょうか。そう考えてわかってきたのは、この授業が、子どもが言っていることすべてをもっともなこととして受け取り合う形で終わっていて、「へえ、それはどういうことだろう」とさらに考えようとしたり、そして、「そうだっ!」と何かを発見したりしていないということでした。学ぶ醍醐味は、その時、それまで明確ではなかったことが明確になったり、思ってもみなかったことに気づいたりするときに生まれますから、この授業にまだ望むことがあるとすればそういうことだと思いました。

女の子が人並みに豆まきをしたいと思ったことも、母親の病気を悪くしないように豆

まきをして鬼を追い払おうと考えたことも、読みとして十分に理解できることです。また、そのことばを耳にしたおにたが「とび上がる」ほど驚き「おにだっているいろいろあるのに」とつぶやく気持ちも痛いほどよくわかります。どちらもそれは自然に湧き起こった感情だからです。にもかかわらず、ここで二人の間が断絶してしまうのです。どちらも悪くないのに、それぞれの気持ちは自然なものなのに、悲しくも二人の関係は切れてしまうのです。それはどうしてでしょうか。

それは、おにたと人間の女の子の間にどうにも越えられない「溝」が存在するからです。「ごんぎつね」の、きつねと人間である兵十の間にある「溝」と同じようなものかもしれません。この断絶する「溝」を浮き上がらせ、そのやるせなさ、痛みを心で感じ取ること、それがわたしの言う「ジャンプ」なのです。

このことが子どもたちの「ジャンプ」になるためには、当然のことながら、女の子の豆まきをしたいという思いとおにたの「とび上がる」ショックが子どもたちからわき上がらなければなりません。Kさんのクラスの子どもたちは、まさにその二つを出してきたのです。素晴らしいことです。しかし、その二つが別々の考えたいこととしてつながり合わずに終わっている感じがするのです。それを別々の考えたいこととして終わらせるのではなく、その二つをつなげて感じ取るように仕向けられたらどんなによいでしょうか。そうすれば、そこから子どもたちの「ジャンプ」が生まれると思うのです。

それには、Kさんはどうすればよかったのでしょうか。わたしはKさんになったつもりで、Kさんの学級の子どもたちのことばに向き合いました。そのとき、わたしが実行したこと、それは、まさに、「今」発せられた子どもの考えを聴きとり、その上でその「先を読む」ということだったのです。

二つ目の問題提起をよく聴いてみますと、その子は、「まことくんの家とかで豆まきしていた。ひいらぎだっとかざっていた」と述べてから「おにたはなぜとび上がったか」と言っています。つまり、この子は、人間が鬼を追い払うために豆まきをしたいと思っていることをおにたはわかっていたはずなのに、どうしてそんなに驚いたのかということを行っているのです。ですから、このことばを受けた子どもは「女の子と友だちになれると思ったから」とか「ここやったら豆まきとかするとか思っていなかつから」というように答えているのです。

この受け答えは見事です。女の子がまことくんとどう違うのかを述べているからです。それは、とび上がるほどのおにたの驚きはさきほどまで考えていた女の子に対するおにたの思い抜きには考えられないということを表しています。子どもたちは、女の子のこととおにたのことをつなげて考えてきたのです。

もしこのとき、わたしが述べたような、おにたと女の子の「溝」についての読みが教師にあったら、どのような対応が可能だったのでしょうか。

まず「女の子と友だちになれると思った」と「ここやったら豆まきしない」という二人の子どもの気づきをみんなで受け止める必要があります。それには、おにたが見たこの家の状況、女の子とお母さんの状況、そして、女の子に対しておにたの見たこと、感じたこと、したことに戻らなければなりません。それには、そういう目的をもって教科書の文章の音読を入れることです。たとえば、この二人の発言の後、「ここやったら豆

まきしないとおにたが感じ、女の子と友だちになれるときえ思ったのは、どういうことがあったからか、前の場面に戻って読んでみましょう」というように。

音読が終わったら、二人の言ったことについて他の子どもがどう考えるか聴いてみるのです。そうすれば、赤ご飯と煮豆を持っていったことも、それを受け取った女の子の喜びの顔を見るおにたのことも浮き上がり、おにたが女の子にどういう思いを抱くようになったかがことばになって語られるでしょう。それは、前時で読んでいたことなのかもしれませんが、そうであってもここで再び話題にすることで、クラス全員の子どもの心にそれが呼び込まれることになるのです。

おにたが女の子に、まことくんたちとは異なる特別の思いを抱くようになっていたら、女の子の「豆まきがしたい」ということばは衝撃的なものになるはずですが、それは、女の子の思いとおにたの思いの二つを絡ませることになります。そのとき、子どもたちは、きっとおにたの衝撃を感じ取るでしょう。

そうになったら、授業の最後に、「女の子が豆まきをしたいと言う気持ち、考えたね。女の子の気持ち、みんなが言ったようによくわかるよね。そして、その女の子のことばをおにたがどんなふういきいたか、そのことも考えてくれました。最後にね、この二人の気持ち、並べて考えてみようよ。そうして、みんなの心の中に浮かんできたこと、みんなで聴き合ひましょう」と言って、ここでグループを入れてはどうでしょうか。もちろんこの場面の音読をもう一度入れてから。

「溝」を感じたのは、おにたであり、女の子はその「溝」の存在についてなんにも知りません。女の子はおにたにとってそれがどんなにショックかを知らないまま、お母さんのことを案じて豆まきをしたいと言ったのです。それが、おにたにとっては決定的な断絶になった、そのことが切ないです。その切なさ、「溝」のかなしさは、二人の思いを比べなければ浮き上がりません。どこまでのことを子どもが語ってくれるかはわかりません。ことばにならないかもしれません。そのようには読んでこないかもしれません。それならそれでいいのです。異なる二人の思いをひき比べ、心で感じてみるのが大切なのですから。

この授業には、こうした「ジャンプ」が実現するチャンスがあったのです、それほど素敵に子どもは読んでいたのです。そう思うと、授業をしながら、そこに通じる道筋に気づければ、つまりその「先」が読めればどんなによかったらうと思ったのです。

もちろん、これはわたしの一つの考え方であり、「ジャンプ」を仕掛けるとしてもまた違った考え方があるでしょう。学びの生み出し方に決まったものがあるわけではないのですから。けれども、ここでわたしが綴っているように、自分がこの授業の授業者だったらと考え、それぞれの考えを出し合うことをしなければ、「先」を読み、子どもの学びを深める「ジャンプ」は生み出せないのだとわたしは思います。そういう意味で、本論で述べたわたしの考えが授業における「ジャンプ」を考える一つの契機になればうれしいです。

こうして考えてみると、「先」を読むには、経験に裏打ちされた知識と感覚が必要であるように思われます。そして、今出された子どもの考えや考えと考えの関係が、その知識と感覚のどれと合致するのか、または、そのどれとどれがつながり合ったものなの

か、そういうつながりや組み立てがとっさにできることが必要なのでしょう。

しかし、これまでの経験による知識や感覚だけでは「先」が読み切れない場合もあります。それほど、子どもとのかかわりは多様であり一回ごと新しいものなのです。これまでの経験にはない子どもの事実、それに対応するために必要なのは「想像力」です。とは言っても、それは単なる空想ではありません。事実に基づき、事実が存在する確かな要素から生まれる想像です。つまり、それは、これまでの経験を足場にその場で創造する想像力だと言えるように思います。

「先を読む」、それは、山岳警備隊の山田分隊長が何年かにわたる経験によって身に付けた「仕事の流儀」です。それだけに、それは簡単に身につくものでないでしょう。けれども、どんな仕事であっても、どこまでも追い求め、少しずつでいいからそれを可能にしていく努力を欠かしてはいけないのだと思います。わたしにDVDを託してくださったKさんは、その努力を今まさにしている一人なのだと思うと、そういう人が身近にいることの喜びを感じます。

新年度が始まります。子どもたちとの毎日が待っています。遠くの「先」を見つめるように心がけながら、直近の「先」を探る気持ちを忘れず、そのための感性と想像力を磨いていきたいものです。